
紅葉の乙女

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉の乙女

【Nコード】

N61491

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

燃えるように見事に赤い一本のもみじの木。その異様とも思える赤さに死体でも埋まっているのではないかと噂が立ち、木にも変化が現れる。訪れた紅倉の見立ては？ 《霊能力者紅倉美姫シリーズ17》

前

11月。

一本のもみじの木が話題になっていた。

住宅街を6ブロック、およそ1キロに渡って貫く遊歩道があつて、その所々にちよつとした広場があるのだが、そこに植えられている一本のもみじが、紅葉が始まると、際だって鮮やかに、まるで燃え上がるようにまっ赤に染まったのだ。

それはもう見事なもので、道行く者は誰も思わずふり仰ぎ、散歩を日課にしている近所のお年寄りらはベンチに座って日の暖かい内は何時間もこの木を眺めてニコニコしていた。

ベビーカーを押した若い母親たちのたまり場にもなっていた。

やがて隠れた紅葉の名所としてテレビに取材され、ネットでも紹介されると、日頃は静かで穏やかだった遊歩道の広場が、朝から晩まで見物客の押し寄せる騒ぎとなった。

それほど見事な紅葉ぶりだったわけだが、

評判が立てば何かしらケチをつけたがる者が現れるもので、

この紅葉の赤さは異常だ、

下に人間の死体でも埋まっているんじゃないか、

などと噂が立った。

たしかに、周りの木と比べても一本だけ特別にまっ赤で、そのように勘ぐりたくもなる。

そう思つて見ると、

その赤は妖気を放っているようで、

その色に何か特別の主張が込められているようで、
気味悪く思う者も多くいた。

そんな噂を助長するように、

今度はその幹に変化が開始めた。

木は高さが4メートルほど、幹は大人がちょうど一抱えするほどあったが、

大人のちょうど顔の高さに、樹皮が黒く盛り上がってこぶができ、それがなんとなく人の顔のように見えるのだ。

しかもそれはやがてパツクリと割れ、亀裂は下に延び、広がると、

中から白い樹肉が現れた。

それがまた所々丸く盛り上がり、なんと、まるで裸の女が出てきたように見えるのだ。

樹皮が割れて覗いた樹肉などふつう灰色や黄色をしているものだが、これは白、しかもほんのりピンク色が浮かんできて、実に滑らかな女の肌に見えるのだ。

本当に女の死体が埋まっているのか？

若者は好奇心で携帯電話のシャッターを押し、

いやいやこれは神仏が宿ったものに違いない、ありがたやありがたや、

と手を合わせる年寄りもいた。

再びテレビカメラが訪れ、話題は最高潮に盛り上がったのだが。

深夜、この木は何者かに放火され、すっかり燃え落ちてしまった。周囲に住宅が密集し、一時騒然となったが、通報が早く、周囲への延焼は食い止められた。

心ないものの犯行に人は憤慨し、落胆したが、強烈な興味を抑えることはできなかった。

噂の真相は？

焼け残った根が掘り返され、地面の下があらわになったが、けっきょく、

骨なんか見つからなかった。

人々はがっかりし、祭りの終わりを惜しみつつもすぐに忘れてしまおうとした。

ところがすぐに放火犯が捕まった。

大学生の男だった。

動機は死体が埋まっているという噂を確かめたかったという馬鹿なものだったが、

彼は自ら自首してきて、

その理由というのが、

寝ようと目を閉じるとまぶたにまっ赤な光と人影が浮かんできて全く眠れず、まいってしまってもう気が狂いそうだ、

というのだ。

再び、

心霊現象？

神仏の祟り？

と論争されたが、肝心の木が焼失してしまっではむなしく、やがて人々の関心は薄れ、

遊歩道の人通りも元通り静かになった。

後

白い毛のロングコートに、白い綿帽子、黒い大きなサングラス姿の紅倉美姫が黒い大きな犬に引っ張られて歩いてきた。

ベンチの前に来ると、

「ストップ」

と犬に命じ、

「お隣り、よろしいですか？」

とベンチに座っている婦人に訊いた。

「ええ、どうぞ」

「失礼します」

紅倉がベンチに腰掛けると、犬は隣の地面に座り、気持ちよさそうに腹を温かな地面に載せた。

紅倉も婦人も穏やかな顔で前の景色を眺めた。

燃えたもみじの木はすっかり片づけられ、開いた大穴もすっかり平らにならされて、背後に危うく黒く焦げたブロック塀だけがある。婦人はずいぶん高齢だが、背筋がしゃんとして肩も張って、知的で上品な顔立ちをしていた。

紅倉が穏やかな平和な声で言った。

「なるほど、ここに絵があったんですね。『紅葉の乙女』さん。

あなたが、犯人、ですね？」

「おやまあ、犯人、ですか？ あなたは、どういう方ですか？」

婦人はとがめるでもなく、むしろ楽しそうに訊いた。紅倉も

「そういう者です」

とニイッと笑って言った。

婦人も、そう、と微笑んで、

残念そうに何も無くなってしまったところを見た。

「わたしがやっていたんでしょうか？」

「物にも魂は宿ります。ましてや長く生きている植物ならなおさら

です。あなたの想いに木が応えてくれたんでしょうね。似ていたのでしょう、その絵の木に？」

「ええ、枝振りがね、とてもよく似ているように思ったの。だからこの木は大好きで、いつもこうして眺めていたわ。

昔ね、

このお婆あちゃんが若い乙女だった頃、

近所に素敵なお兄さまがいてね、

お家が焼き物の工場をやっていて、絵の好きな、優しいお婆っちやまだったわ。

わたしをモデルに一枚の絵を描いてくれたの。

わたしをもみじの前に立たせて何枚も写生してね。

動いちゃ駄目だよって何度も注意されたけど、わたしは楽しくって、嬉しくってならなかったわ。

やがて出来上がった絵をわたしに渡して、

あの人は出征していったわ。

そして、

戻ってこなかった。

わたしは他の人と結婚して、お嫁入りの時、

その絵は捨ててしまったわ。

嫁いだわたしは幸いとても幸福な生活を送ることができました。

子や孫に恵まれて、特に辛い思いもせずに生きてこられました。

わたしは幸せな女です。

それなのに罰当たりにも、

昨年長く連れ添った夫が亡くなりまして、そうしたら、あの木を見るたびに思い出すのはあの絵のことばかり。

うふふ。

まったくなんて破廉恥な女でしょう。

でもそうしたらまるで絵のように真っ赤な紅葉をいたしまし
て、

喜んでいたら、まあなんてことでしよう、

木から人の姿のような物まで浮き出して、まるであの絵にそっく
りではございませんか。

あれ恥ずかしと思いつながら嬉しく思いましたが、

もっともあの頃は人が多くて落ち着いて眺めることもできません
で、でもいずれ葉も散りましょうし、来年もまたあの絵に会えるか
しらと老い先短い身で心待ちにする思いでいましたのに、

ああ、悲しくて口惜しくて残念で。

せつかくあの絵と再会できたのに、再び失ってしまうなんて、

はあ、

やっぱり罰が当たったんでしょうねえ」

婦人の自嘲に紅倉も苦笑するように言った。

「そんなことはないでしょうけれど。」

あのー、思い違いをなさってませんか？」

婦人は不思議そうに紅倉を見た。

「その絵ですけれど、捨てたとおっしゃいましたが、そんなに大
事な絵をあなたの一存で捨ててしまったとは思えませんねえ。他家
に嫁ぐにあたって、あなたがそういう覚悟をなさった、ということ
だったのではありません？ よーーーく、思い出してみてくださいさ
い」

言われてじーじーじーと考え込んだ婦人の顔にパアッと驚きが広
がった。

「絵は」

婦人の連絡で昔住んでいた家の蔵から、長持の中に嚴重に紙で包まれた額装の絵が見つかった。

それはまっ赤な紅葉のもみじの前に白い着物の乙女が立つ綺麗な日本画で、白い着物にもみじの赤が映えて背景に溶け込むようだった。

後日大事に送られてきた絵と婦人は半世紀ぶりの再会を果たした。

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6149i/>

紅葉の乙女

2010年10月8日15時26分発行